

各地域センターの立ちあがり運営資金をつくろうと、福祉まつりや市民まつりへ大がかりなバザーやフリーマーケットへの参加を計画している。団地まつりもいい。やがては、各地域センターで、「仕事、いきがい、福祉」の高齢協まつりを計画していくつもりだ。4月12日「さいたま高齢協」が設立した意味は、労協にとっても本当の意味で地域での再生と自らの改革の糸口になるにちがい

ない。

長い人生の中で練られてきた高齢者達の知恵と経験と力が、企業社会の論理から解き放され、協同という人間と人間の結びあいの中で活き活きと生かされる時、新しい世紀への展望が開かれるにちがいない。今は、その道程の一つ一つを大切にし組織と個人が自らの糧にしつつ確実に一步をふみだすことだと思う。

## 協同のひろば

### 岡山県高齢協設立総会を終えて

藤田 徹

(岡山県／センター事業団中四国事業本部)

#### とにかく一步を踏み出そう

岡山での高齢協づくりの直接的な第一歩は、1995年12月2日の「岡山県高齢者協同組合設立に向けた市民懇談会」から始まる。当日は60名の参加で一応成功したが、今振り返って見るとそれにつながる2つの糸があったように思う。一つは今から3年前に取り組んだ映画「病院で死ぬということ」の上映運動、もう一つは翌年の7月に開催した「雇用不安と労働の未来シンポジウム」であった。

映画上映運動は、病院をはじめとした100を超える団体、個人の賛同を得、岡山市内5カ所で計3000名を超える人たちが鑑賞する運動となり多くの人の感動を誘った。また、雇用シンポジウムは折からの猛暑の中200人を超える参加で“今なぜ仕事おこし、地域づくりなのか”を熱っぽく語り合った。この二つの取組の中で私たちは地域で普通に生活している人たちの中にある様々な思いやエネルギーにふれてきた。高齢協づくりを始める

に当たって漠然と感じていたことは、この二つの取組を通じてできてきたつながりを何かの形にできないものだろうかということ、また、それを通して労協の地域での市民権を広く強いものにしていきたいということだったようだ。

とは言うものの当時（2年前）は高齢者協同組合といつてもまだ全国でも三重一県にできただけで自分の中の必要性やイメージも漠然としており、なかなか一步が踏み出せないでいた。雇用シンポを通じて出会った地域の岡本さんが自分と一緒にやりたいと言ってくれていたものの足を踏み出すまでには至らなかった。夏が過ぎ秋も暮れようとしていた10月下旬、これ以上考えていても何も生まれないと、岡本さんに「とにかく設立の宣言集会をしてしまう所から始めましょう」と、一步を踏み出す決意を固めての出発だった。

#### できることをできる所から始めよう

～準備会、ヘルパー講座などのスタート～

12月2日の市民懇談会は地元紙の山陽新聞はじ

めマスコミがこぞって取り上げてくれ、この構想が時代の要請にかなったものであることを改めて感じさせてくれた。年が明け12月2日に集まった人、その後の新聞報道を見て問い合わせてくれた人、又これまでの取組でつながった諸団体にも呼びかけ第1回の準備会的な会合を2月に持った。約20名の人が集まり各自の思いを出し合った。中には「やっと自分の思っていたことが実現できそうな組織に出会った。すべておまかせではなく私たち自身がもっと力を発揮しあいましょう」といって下さる方などもいて随分と励まされた。

準備会では出資金1口を5000円とすること、講座などやれそうなことをどんどんやっていこうということ等を話し合ってきた。その流れに沿って3月事務所開設、4月花見、5月ヘルパー3級養成講座開講（この講座は講師の話に高齢協の必要性や方向性を伝えられ励ましたという意味でも役立った）、6月に長生き経験交流会、8月ボケないための10か条学習会、10月から英語・ワープロ講座の実施といったやれるところからの取組を始めていった。

### 設立総会の延期と 形をつくることへのあせり

7月第1回のヘルパー講座も終了した。しかし高齢協の組織づくりは遅々として進まずこのまま当初予定していた11月3日の設立を迎えるかどうか決断がせまられた。8月、中心メンバーが集まった場で設立の延期を提案することになった。理由は夏はさみ実質3ヶ月しかないこと、もっと運動を盛り上げる必要があることなどであった。新たに1997年4月20日を設立日と決め意思統一をし直した。参加していた人から「この運動の意義の大きさをかみしめ、死ぬ気でやらなければ成功しないぞ！」と言われ、今までのあいまいな姿勢に渴を入れ直された。

しかし、とにかく設立しなければという思いはあせりとなり、「組合員の人数を増やすために提供できるサービスを増やそう」ということにつながり、何のためにそれをするのかがあいまいなま



4・20設立総会

ま形だけ整えることにつながりかねない。この当時を振り返ってみると事務局の募集の方法やヘルパー講座終了生への形式的な組織化など後々しこりに残ってしまう様なまずい活動をしていたことに今更ながら悔しい思いがする。

“思いがあれば方法はいくらでもある”これは世話人として全体を引っ張っていって下さった安永道生さんの言葉だが、まず方法ありきではなく、思いありきなのが高齢協なのだと思う。

### 9.14東京高齢協設立から学んだこと

1996年9月14日全国の期待を集め東京高齢協が設立された。岡山からも5人のメンバーが参加した。当日の様子はすでに報道されているように、日比谷公会堂一杯に東京の高齢者の思いあふれる熱い総会になった。岡山から参加したSさんは「僕は今までこの組合はどうなんだろうと斜めにかまえて見ていたが今日参加してこれは本物だと思った」と言いその直後に1口5000円を出資し正式な組合員となった。

この総会を通じて私が感じたことは、地域で普通に生活している人たちの嘘のない思いや高齢者の持っている力とエネルギーのすごさだった。そしてその力を結集した取組が労協の若手を中心とする各々の地域での地道な懇談会の積み重ねだったということだった。「岡山でも地域懇談会を無数に開催し一人でも多くの高齢者と結びつくことを設立まで必死でやり抜こう」これが参加後の一番の思いになった。振り返って見てこのことが設立にむけた最も大きな力になっていったと思う。

## 地域懇談会の中から見えてきた 高齢者の思い

冬も近づく11月から県内各地で地域懇談会を次々と行っていた。会場周辺にチラシを撒き、新聞の催し物案内に掲載するという単純な方法だったが設立総会まで計20カ所で350名を超える人たちとのつながりに広がっていった。

中にはたった一人しか来ない懇談会もあったが“一人の人と2時間じっくり話ができる”と思いくじけず続けていった。実際その中から後々中心になってくれる人と巡り会えたり、地域で普通に生活している高齢者の思いにふれ高齢者協同組合づくりへの確信が深まっていった。その様子を少しだけ紹介しよう。

陵南地区の82歳になる男性は「高梁市の方で長年畑をしてきたが、体が弱り5年前息子夫婦の世話になることになり岡山市に出てきた。しかし、まわりが新興住宅地なので知り合いもできずやることもなく空しい日々だ。気軽に集まれる場所と仲間がほしい」といい、また、備前市の73歳になる男性は「2年前妻をガンで亡くした。3年介護してきたが今でも時々寂しくなる。老人会もいいがまだまだ元気だし人の役に立つことができればうれしい」。総社市内に住む63歳の女性は「主人を15年前に亡くし、子どももいないので一人暮らしをしている。親戚との間もしっかりいっていない。老後のことを考えると自分のためにも地域のためにも今の自宅を活用できないかと考えている」。その他にも、嫁とウマが合わず一人暮らしを始めたが簡単には家を貸してもらえない相談にこられた72歳の女性。会社の激変に疲れ果て早めに退職をし、その後の人生設計を模索している50代の方々。自分の父親を見ていてもっと元気にしたいと来られた女性etc。

一言で言うと自分らしい人生を送りたい。そのための仲間と活躍できる場を求めている人たちがこんなに大勢いるのかと気づかされ、ここにこそ高齢者協同組合の存立する根拠があると確信を深めた。一方高齢協を知らずにいる高齢者や知って

もすぐには関心を示さない圧倒的多数の高齢者の中にある要求をもっともっと探し出していく、そんな組織していく事が高齢協の使命だと感じられたのもこの地域懇談会を通じてだった。

## 設立に向けた世話人会の発足

97年1月より設立に向けた準備世話人会が20名で発足した。設立まで計7回の世話人会を行ってきたが、順調にばかりといったわけではない。規約や事業計画の議論にさしかかる頃（それはちょうど3.16のプレ集会前後であった）、それまでくすぶっていた一部の世話人の不満が吹き出た。「何故そんなに設立を急ぐのか、規約や事業計画をもっとしっかり議論してからやるべきだ」「労働者協同組合という組織がわからないのに高齢協をつくってもいいのか」「労働者協同組合はどこまで財政的支援をしてくれるのか」「事務局が無いに等しい状態で実務面が不安だ、責任が持てない」

3月20日の世話人会ではそれらの疑問を真正面から話し合おうと、今何が最も大事なことかを議論し合った。「確かに規約や事業計画、実務体制、財政面など不十分だと思う。しかし、高齢協という組織はお互いの不十分さ、違いをつつき合う組織ではなく、それを埋め合い支え合おうという日本でおそらく初めての高齢者自身の新しい組織を創ろうというのだから、よくわからない不十分さを前提にして創っていくしかないのではないか、不十分な面は実際の活動の中で1年かけてより良いものにしていこう。今最も大切なことは高齢協へのこんなにも熱い思いを持った人たちが大勢いること。その人たちの思いを共有し外へ発信する岡山の高齢協の第1歩と設立総会を位置づけ、形式ではなく中味で成功させることなのではないか。そのために①これまで出会った人たちに総会成功に向けた行動に参加してもらうこと。②まだ高齢協を知らない圧倒的な市民に設立を知らせ呼びかけること。③その先頭にここに集まっている世話人が立ちきること。以上のことを訴えかけた。東京高齢協の取組なども大きな刺激になり、それまでモヤモヤしていた世話人会の雰囲気も変

化し、とにかく設立総会を感動的な中味で成功させようの一点で、チラシ撒き、記者会見（これには世話人7人が参加）、第1回高齢協まつり（70名参加）と残り1ヶ月集中した取組が行われていた。

### 大盛況の設立総会に

4月20日設立総会当日、早朝から快晴に恵まれ気持ちの良い総会日和となった。開会30分前、続々とつめかけてくる人波に受付のみんなの顔も紅潮している。ほぼ全てのマスコミも取材にきて下さり、TVのライトなど否応なく会場の雰囲気も盛り上がってきた。

オープニングは県高齢協の出陣にふさわしく備前陣太鼓で華々しく幕を開けた。内容の詳しい事は5月5日号の労協新聞に譲るが、当日は当初予想していた250名の参加者を大幅に上回る370名の参加者で大盛況であった。メッセージもなんと180通も届き、その一つ一つに設立を喜んでくれている人の顔が見えるようで暖かいメッセージ集になった。量もそうだが参加者が最も感激したのはその内容であったと思う。

世話人を代表しての岡本さんのあいさつから始まり、来賓、安永道生さんの記念公演、組合員、最後の藤井理事長のあいさつに到るまでどれ一つ形式的な発言がなく、本当に思いのこもった設立総会になったと思う。マラソンの有森裕子さんのお父さんの発言に象徴されるように、この総会に参加して「我が意を得たり」と、より積極的になった人が多かったことも特徴だったように思う。

この取組を通じ、一人一人の世話人の方やセンター事業団の中心メンバーも少しずつ変化してきたように思う。設立宣言を読み上げた畠さんは最初はほんのつき合いで参加した人だった。それがこの半年、世話人会やまつりを通じて少しづつ主体的になっていった。地域懇談会や世話人会での多少のゴタゴタが逆に皆の認識を深め、高齢協を創るのは自分たち一人一人なんだというところに向かっていったように感じる。

### 総会その後

設立総会後、山陽新聞やNHKを始めとした各マスコミ報道もあり3~4日は50件を超す電話ラッシュ、資料送付で明け暮れ、のんびりしている暇などなかった。今でもポストをのぞくと毎日加入申込用紙や総会の感想文が送られてきている。総会後の1週間で約40名の新たな仲間が加わったたり、岡山市社協の課長が翌日わざわざ電話をくれ「できる援助は何でもしますから何なりと言って下さい」と言って下さったりしている。

中四国各県からの問い合わせも多く、自分のところにもこんな組織があつたらいいのにという思いが電話の向こうから伝わってくるようである。これらに見るよう設立ということの意味の重さを実感させられる日々が続いている。

この期待にどう答えていくか、そのカギは本当に参加してきている組合員が主体的に運営に関われるかどうかにかかっている。それは、これまでの労働者協同組合運動の中で蓄積してきた全組合員経営の質をもう一段高くすることにつながっていくのだと感じている。最後に寄せられたメッセージを一つ。

☆「永年の希望がありました。がっちりとした組織がほしいと思いますが、それはこれから急いで、ゆっくりと、おおらかで、しかもしっかりと楽しい会にしていきましょう。私も71歳になりましたが、まだまだ若い人たちに負けずに頑張っていこうとの気持ちを持っています。私たちの青春時代は苦々しい戦争時代でしたから、あと残された歳月を、生きていてよかった、この会に入って良かったと思うような会にして下さい。私も喜んで参加させてもらい、共に頑張る決意です。  
(岡山市・Sさん)」